

ダロウェイ夫人とラムゼイ夫人

——ヴァージニア・ウルフのイメージ研究II

太田素子

20世紀初頭のモダニズム作家の一人である Virginia Woolf は、イメージを重視する作家であり、そのイメージは、個々の場面や個々の作品を超えた相関性をもって体系化されていることは本論以前に既に述べてきた。本論では、この「空、陸、海」に体系化された Virginia Woolf のイメージ宇宙に、*Mrs. Dalloway* の女主人公 Clarissa Dalloway と *To the Lighthouse* の女主人公 Mrs. Ramsay を重ね合わせていくことで、二人の共通性と異質性の本質をイメージの側面から裏付けていきたい。

Mrs. Dalloway (1925) と *To the Lighthouse* (1927) は、作者の中期円熟期に相次いで書かれ、いずれも彼女の代表作であるのみならず、パーティをひらく女主人公をとりあげるといふ共通の主題を担っている。しかも、この二人の女主人公は、一方は、孤独と死に魅せられつつも生の中に踏みとどまり、他方は、人間同士の結びつきに情熱を燃やしつつその死までが描かれているのである。ここでは、彼女たちを表すイメージを、「空、陸、海」に分類して考察していくことによって、この二人の女主人公の本質を明らかにしていく。

Clarissa Dalloway と Mrs. Ramsay は外面的には非常によく似た状況にある。中年から初老にかけてのまだ若さと美しさをとどめた女性で、共に社会的地位のある夫に愛され、子供もあり、パーティをよくひらいては人々を集める社交的な女性でもある。このような二人の女性は、現実の生を表す「陸」に属するさまざまなイメージによって特徴づけられている。華やかな社交的な女性である Clarissa は、随所にその冷やかで硬い側面が「槍」や「鉄」「火打ち石」「ナイフ」「氷柱」のイメージで語られている。

She was straight as a dart, a little rigid in fact (p. 85)

That was her self — pointed; dartlike (p. 42)

She was like iron, like flint, rigid up the backbone (p. 72)

She sliced like a knife through everything (p. 10)

Clarissa was as cold as an icicle (p. 90)

これらのイメージの多くは、若い頃の Clarissa に失恋し、今尚、彼女を忘れかねて訪ねてくる Peter Walsh を通して主観的に語られることが多いとはいえ、それにとどまらな

い彼女の本質をついていると言えよう。彼女の「冷たさ」(coldness) についての記述は他にも多い。

But she is too cold (p. 49)

This coldness, this woodenness, something very profound in her (p. 68)

Cold, heartless, a prude, he called her (p. 10)

彼女のこの「冷たさ」はどのような質ものであるのかをさらに考えていくと、“some contraction of this cold spirit” (p. 36) から夫を拒んだことがあると彼女自ら告白しているように、彼女の cold spirit には、結婚生活が深くかかわっている⁽²⁾。帰宅の遅い国会議員の夫は妻の大病以来寝室を別にしている。深夜、孤独感を読書で紛らせようとする彼女は自らを、女性としての暖かく成熟した魅力に欠け、夫を冷たく拒み、夫との肉体的充足感も心の繋がりももちにくい女性であると痛切に感じている。そのような彼女を表す典型的イメージとして、彼女は、結婚生活が長いにもかかわらず「処女」「修道女」のイメージで語られるのである。

She could not dispel a virginity (p. 36)

She made to hide her dress, like a virgin protecting chastity, respecting privacy
(p. 45)

Virginity ... which clung to her like a sheet (p. 36)

She felt like a nun who has left the world and feels fold round her the familiar veils and response to old devotions (p. 33)

Like a nun withdrawing (p. 35)

「処女性」も「修道女」もいずれも結婚生活とは相容れないイメージである。結婚しながらこのようなイメージで語られる彼女は、夫とだけでなく、一人娘の Elizabeth ともうまくいっていない。又、再会した Peter Walsh の想いを感じつつ結局は傍観者的な立場をくずせない。このように、彼女が最も愛しているはずの人々との心の繋がりが感じられない Clarissa はまさに “I am alone for ever” (p. 53) と嘆じざるをえない状況にあり、その原因は、“what she lacked was ... something warm which broke surfaces and rippled the cold contact of man and woman, or of women together” (p. 36) と語られている。人々が感じ、また、Clarissa 自身の感じている一連のイメージはまさに、coldness を連想させるものである。しかも、Clarissa は自らの coldness を自覚しつつも、それを嫌悪し、成熟した女性のもつ暖かさにあこがれている。そして、孤独を自覚しつつもそれに耐えられない Clarissa は、人間的繋がりを求めてパーティをひらくという点において、Mrs. Ramsay と繋がっていくのである。

Clarissa の coldness に対し、Mrs. Ramsay が人々に与える印象は暖かく豊かなものである。たえず、人々に “O Mrs. Ramsay! dear Mrs. Ramsay ... Mrs. Ramsay, of course!” (p. 68) と呼び掛けられる彼女は次のように語られている。

She had been admired. She had been loved Men, and women too, letting go the

multiplicity of things, had allowed themselves with her the relief of simplicity.

(p. 68)

Clarissa が、自分の殻に閉じこもる未成熟で硬く冷たい「処女」のイメージとすると、Mrs. Ramsay は、人々から頼りにされる成熟した「女性 (woman)」のイメージで語られている。

The charm of a woman, not a girl (p. 54)

They came to her, naturally, since she was a woman, all day long with this and that ; one wanting this, another that. (p. 54)

息子の James が雨で明日は灯台へ行けないかもしれないと意気消沈しているのをカづけ、夫が必要とするときにはいつも傍に行き、滞在客の一人が場違いな気分であれば一緒に町に行かないかと誘いの声をかけ、画家の Lily Briscoe のためにモデルになって窓辺にすわり、独身の Lily と同じく独身の別の滞在客との縁結びをしようとする。一人ぼっちの人間を慰め、結びつけ、“They must marry” (p. 96, p. 113. etc.) と口癖のように言いながら縁結びを企てる Mrs. Ramsay の姿勢はまさに Lily の言うごとく “Giving, giving, giving” (p. 232) に他ならない。そのように、人々に頼りにされ、人々の悩みを吸い取ってくれる Mrs. Ramsay を表す典型的なイメージは “sponge” であり “link”、“nurse” である。

She often felt she was nothing but a sponge sopped full of human emotions. (p. 54)

Beyond a shadow of a doubt, by her laugh, her poise, her competence (as a nurse carrying a light across a dark room assures a fractious child) (p. 63)

She [i. e., Lily] had no attachment here,... as if the link that usually bound things together had been cut (p. 227)

以上のイメージはいずれも、人々の悩みを吸い取り、人々を癒し、人々の間を繋ぐイメージであり、個々には孤独に在る人間同士の結び付きを復活させようとの試みがそこには感じられ、それが、人々に暖かいイメージを抱かせる理由でもある⁽³⁾。

このような Clarissa と Mrs. Ramsay のイメージによる相違は、彼女たち二人が共通のイメージで描かれている時でさえ顕著である。その共通のイメージとは、「子供」「眠り」「女王」のイメージである。まず、子供のイメージについて考えてみたい。子供のようなどいう場合、いずれも大人と比較されて、未だ大人の汚れを知らぬ無垢で純粋なという意味と、大人としての成熟に達しておらず未熟で我儘なという意味があるが、Clarissa の場合を考えてみたい。Clarissa は以下のような子供のイメージで語られている。

like ... a child exploring a tower (p. 35.)

この子供のイメージは、先に述べた彼女の「処女性」や「修道女」のイメージと同じ場面で同じ用いられ方をしている為に、一人前の女性としての成熟をしていないという意味合いで描かれており、彼女の coldness を描く一連のイメージの一つと考えられる。

“she always felt a little skimpy ... schoolgirlish” (p. 8) も同様である。一方、Mrs. Ramsay にも同じ子供のイメージが次のように用いられている。

She was childlike (p. 81)

How childlike, How absurd she was (p. 157.)

She could trust herself to it utterly ... as a child staring up from its pillow (p. 164.)

Instantly, for no reason at all, Mrs. Ramsay became like a girl of twenty, full of gaiety (p. 180.)

これらの子供のイメージは決して子供の未成熟な面を描いているのではなくて、子供の持つ無邪気な陽気さが示されて、Mrs. Ramsay の魅力を形づくっていると言える。

このように、同じイメージが用いられながら、彼女たち二人の異質性を表すものの一つに眠りのイメージがある。Clarissa は叫び声をあげる時 “as a sleeper in the night starts and stretches a hand in th dark for help” (p. 53) と描かれている。闇の中で悪夢から目覚め叫ぶ sleeper のイメージは、夫と寝室を別にして、眠れぬ夜を孤独に過ごす Clarissa と重なり合って Clarissa の孤独を浮き彫りにする。これに対し、Mrs. Ramsay の眠りは “like a person in a light sleep How satisfying! How restful!” (p. 186.) と、Clarissa とは対照的にやすらぎと満足感をもって語られている。この場面は特に彼女が女主人役をつとめて成功した晩餐の後の充足感が描かれている場面であるため、同じ眠りのイメージで語られながら Clarissa の孤独感とは無縁である。

さらに、彼女たちを描く共通のイメージの一つに「女王」がある。外見的には、このイメージは二人にぴったり当てはまる。パーティを開き、人々の中心的存在となる社交夫人である二人はまさに女王のイメージである。しかし、この女王のイメージにも、これまで述べてきた二人の違いが表れている。周囲の人間とのコミュニケーションを欠く孤独な女王 Clarissa は “like a Queen whose guards have fallen asleep, and left her unprotected” (p. 49) と孤独ではあるが毅然とした女王のイメージで描かれ、そのような孤独な彼女にとって、人とのコミュニケーションをはかることは “battle” (p. 50) と語られねばならないのである。これに対して、Mrs. Ramsay の女王のイメージに王者の孤独は見られない。彼女は次のような女王のイメージで語られている。

And, like some queen who, finding her people gathered in the hall, looks down upon them, and descends among them, and acknowledges their tributes silently, and accepts their devotion and their prostration before her ... she went down.

(pp. 128-129.)

sponge や link のイメージで語られてきた Mrs. Ramsay はここでも人の中心に在り、人々にかしずかれて充足する幸福な女王と描かれているのである。しかも、孤独であろうが人々に取り囲まれていようが、Clarissa も Mrs. Ramsay も共に女王のイメージがふさわしいのも確かである。

女王としての共通性以外にもこの二人の女性には共に情熱的な面が垣間見られ、それは“pampass grass”という共通のイメージで表されている。Clarissaは昔の恋人Peter Walshと久方ぶりに再会し、Peterが衝動的な涙をみせた時、突然激しい情熱にとらえられて次のように描かれている。

And Clarissa had leant forward, taken his hand, drawn him to her, kissed him—— actually had felt his face on hers before she could down the brandishing of silver-flashing plumes like pampass grass in a tropic gale in her breast. (p. 52.)

直後にはいつものcoldnessがよみがえって、この場面を終わってしまった劇にそして自分を傍観者的な劇の観客になぞらえるClarissaではあるが、たとえ一瞬にしろpampass grassと共に描かれる情熱は否定出来ない。Mrs. Ramsayの同じ側面もやはりpampass grssと共に描かれている。

And he seized her hand and raised it to his lips and kissed it with an intensity that brought the tears to her eyes, and quickly he dropped it,

They turned away from the view and began to walk up the path where the silver-green spear-like plants grew, arm in arm. His arm was almost like a young man's arm, Mrs. Ramsay thought, thin and hard, and she thought with delight how strong he still was... (pp. 110-111)⁽⁴⁾

夫を慰めようと追ってきたMrs. Ramsayはpampass grassを背景に夫に対して若い頃の情熱をよみがえらせる。この二人の女主人公において、pampass grassは共に、男女の間におこる衝動的で突発的な情熱的感覚を表している。そして、この感覚は日常の彼女たちがめったに知覚しないもので、しかも、瞬間的に消え去っていくものではあるが、紛れもなく彼女たちに共通する激しい一面でもある。

pampass grassのイメージはむしろ例外的感情ではあるが、彼女たちを典型的に表す植物のイメージについても考えていきたい。娘のElizabethが潑刺として生命力溢れ空へ向かって伸びる“poplar trees”(p. 148.)と描かれるのに対し、Clarissaに生命の木のイメージは用いられていない。

for the shock of Lady Bruton asking Richard to lunch without her made the moment in which she had stood shiver, as a plant on the river bed feels the shock of a passing oar and shivers: so she rocked: so she shivered. (p. 40.)

Clarissaが植物のイメージで描かれる時、それは生命の木どころか、現実の生である大地に根ざす植物ですらない。たよりなげに川床で揺れる水草である。それは、孤独で、生よりも死に惹かれているClarissaにふさわしいイメージと言えよう。これに反し、spongeやlinkのイメージで描かれる暖かく豊饒なMrs. Ramsayは次のような植物のイメージで描かれている。

James... felt her rise in a rosy-flowered fruit tree laid with leaves and dancing boughs (p. 63)

大地にしっかりと根ざす生命の木こそ彼女にふさわしいイメージである。彼女はまた、“like a tree which has been tossing and quivering and now, when the breeze falls, settles, leaf by leaf, into quiet.” (p. 182.) という風に、木のイメージで描かれている。

次に、陸の生物としては最も空に近い、鳥のイメージについて考えてみたい。以前拙稿で分類したように、太陽は空の中心に在って苛酷な時計の時間を表し、鳥は時としてその攻撃性を発揮して、時計の時間の不可逆性を残酷に提示するが、鳥のこの特質は、二人の女主人公よりも、Mr. Ramsay を描くイメージに顕著である⁽⁵⁾。これに対し、二人の女主人公を描く鳥のイメージは、むしろ地上の生物としての側面が強い。隣人の目から見た Clarissa を描く “a touch of the bird about her, of the jay, blue-green, light vivacious” (p. 6.) では、陽気でむしろけたたましいかけすと重ね合わされているのは彼女の外見である。しかし、“her look ... as a bird touches a branch and rises and flutters away” (p. 48.) や “then in the morning, flirting up and down like a wagtail in front of the house” (p. 170) では、鳥の地上から羽撃いては舞い降りる軽やかな動作に、先に述べた川床の水草に似てどこか大地に根ざしえない Clarissa の不安定な脆さが描かれている⁽⁶⁾。Mrs. Ramsay もまた、鳥のイメージで語られている。

all had folded itself quietly about her, ... as, after a flight through the sunshine the wings of a bird fold themselves quietly and the blue of its plumage changes from bright steel to soft purple. (p. 48.)

ここでは、羽をやすめている鳥の静けさが描かれている。さらに、彼女は次のように鳥のイメージで描かれている。

Her singleness of mind made her drop plumb like a stone, alight exact as a bird (p. 49.)

She was like a bird for speed (p. 160.)

She hovered like a hawk suspended (p. 162.)

Here, she felt ... was the still space that lies about the heart of things, where one could move or rest ... like a hawk (p. 163.)

これらの鳥のイメージは、鳥の速さや軽やかさと共に、静止する瞬間の鳥の、羽を休めるという陸の住人としての側面を明らかにしている。そして、最も Mrs. Ramsay らしい鳥のイメージは “hen” (p.37.) であり、“she was ... forced to veil her crest” (p. 160.) と描かれる。鳥でありながら空を飛べない。めんどりはまさに地上の生きものであり、その特質は家族をまもることにあるという意味でまさに Mrs. Ramsay にふさわしいと言える⁽⁷⁾。

ここまで述べてきたのは、以前拙稿で分類した Virginia Woolf の陸、空、海のイメージの中で地上即ち陸に属するものである。これらのイメージは、空や海のそれよりも、より直截的に彼女たちの特質を辿るイメージである。そして、陸に属するイメー

ジで描かれる彼女たちはそれぞれに孤独を抱きながら、人間同士の結びつきを求めてパーティをひらいていく共通性⁽⁸⁾をもちつつも、Clarissaは孤独とcoldnessという側面から描かれ、他方Mrs. Ramsayの方は人々を結びつけるlinkとしての側面が暖かさのイメージとして捉えられている。

このように陸の住人として描かれてきた二人の女主人公に対して、空はどのような影響を与えているのであろうか。空に最も近い鳥のイメージ以上に彼女たち自身が空のイメージで描かれることはない。既に論じたように、空は太陽と雲⁽⁹⁾によって構成されて、太陽は苛酷な時計の時間を表し、雲はその時計の時間の苛酷さを強調して、生の移ろいやすさを露呈させる役割を果たしている。Mrs. Dallowayにおいて、太陽は「日時計」(“dial” p. 34)として“the dwindling of life” (p. 34)を露呈しつつ、作中に繰り返して鳴り響くBig Benの音と呼応する。雲は、老いと死に毅然と立ち向かう老女の頭上を流れて、老女が経てきた苛酷な生の移ろい⁽¹⁰⁾を示す。To the Lighthouseにおいては、灯台行きを計画する午後から夜への半日と、十年の歳月とMrs. Ramsayの死を象徴的に描く一夜と、灯台行きを果たす十年後の午前中の半日という構成の中に、太陽の運行による逆行しえない時計の時間が露呈されている。これらの空のイメージは、時計の時間にさらされて孤独に在りつつ老いと死が不可避であるという二人の女主人公の置かれた基本的な状況を浮き彫りにする役割を果たしているのである。

空の太陽が苛酷な時計の時間を表し、それにさらされた陸が、現実の生を象徴しているのに対し、海が表すのは、死と、死の彼方に見られるvisionの世界であることも、既に述べた。苛酷な時計の時間にさらされて孤独に在るClarissaとMrs. Ramsayが催すパーティは、そもそも、生の中に在りながら海を視界におさめることで成立する世界である。パーティの目的は、生きている間は決して恒久的には得られない故に束の間(momentary)でも捉えたいヴィジョンとしてVirginia Woolfが特別の意味をこめる「瞬間(moment)」の実現にあると言える。二人の女主人公の眼は、ヴィジョンの恒久的実現の世界である海に、畏れと憧れをこめてそそがれている。しかし、彼女たちの海のイメージは、このmomentary visionとしての「瞬間」と関連して描かれていることが多い。

自らの老いと“the dwindling of life”をしきりに感じるClarissaは、苛酷な時計の時間の支配を束の間逃れて素晴らしい「瞬間」を捉えることを夢見て“diver”のイメージで語られている。

as she stood hesitating one moment on the threshold of her drawing-room [*i. e.* the place of communication], an exquisite suspense, such as might stay a diver before plunging while the sea darkens and brightens beneath him, and the waves which threaten to break but only gently split their surface, roll and conceal and encrust as they just turn over the weeds with pearl. (pp. 34-35.)

さらに、Clarissa は、今宵パーティで着る海色の夜会服を繕いながら、心の重荷を最終的におろせる安らぎとしての死と、その彼方に垣間見えるヴィジョンの世界に思いを馳せている。

Quiet descended on her, calm, content, as her needle, drawing the silk smoothly to its gentle pause, collected the green folds together and attached them, very lightly, to the belt. So on a summer's day waves collect, overbalance, and fall; collect and fall; and the whole world seems to be saying "that is all".... Fear no more, says the heart, committing its burden to some sea, which sighs collectively for all sorrows, and renews, begins, collects, lets fall. (p. 54.)

そして、Clarissa の緑色の夜会服と同じく海を連想させるものとして Mrs. Ramsay の "green shawl" (p. 104.) がある。これも又、夫の求めに応じて彼を包み込もうとする彼女の、人間関係の和の中に「瞬間」を達成しようとする姿勢を表す効果的な小道具といえる。

さらに、この海色の夜会服をまとってパーティに出た Clarissa は「人魚 (mermaid)」のイメージで語られている。

And now Clarissa escorted her Prime Minister down the room, prancing, sparkling, with the stateliness of her grey hair. She wore ear-rings, and a silver-green mermaid's dress. Lolloping on the waves and braiding her tresses she seemed, having that gift still; to be; to exist; to sum it all up in the moment as she passed; turned, caught her scarf in some other woman's dress, unhitched it, laughed, all with the most perfect ease and air of a creature floating in its element. (p. 191.)

パーティたけなわの時、首相と腕を組んで人々に挨拶してまわる Clarissa の充足の「瞬間」にあらわれる人魚のイメージも又、"But age had brushed her; even as a mermaid" (p. 191.) と描かれて、生きている限り人は時計の時間の支配からは免れ得ないことが語られる。しかも、たとえ束の間にせよ、ヴィジョンの世界の体験とその充足感海の人魚というイメージと共に確かに実在したのであった。

Mrs. Ramsay の場合も同じく、ディナーパーティにおける「瞬間」の達成を求めている様子は海のイメージと共に描かれるが、これを辿る前に、彼女の場合はまず "ghost" のイメージをとりあげたい。Mrs. Ramsay は、ディナーパーティのさ中と、彼女の死後の二度 "ghost" のイメージで表されている。ディナーパーティでは次のように描かれる。

gliding like a ghost among the chairs and tables of that drawing-room on the banks of the Thames where she had been so very, very cold twenty years ago; but now she went among them like a ghost; (pp. 136-137.)

「彼女は変ってしまったのに、ほかならぬあの日が、今では美しく停止して、この永い年月の間、そのままそこにあったかのように、すっかり彼女を魅了してしまった」(p. 137.) と描かれているこの場面は、現在のパーティでの「瞬間」ではないが、明らかに時間を超えて記憶に甦る過去の美しい「瞬間」であり、時空をこえて彼女がそれを体験出来る

のは、時計の時間にもはや拘束される必要のない「幽霊」のイメージ故である。さらに、Mrs. Ramsay は、自らの死後に「幽霊」として Lily の前に現われている。自分を暖かく包み込んでくれた Mrs. Ramsay の死による喪失感から立直れず、絵が描けない Lily の前に現われる Mrs. Ramsay の幽霊は Lily が求めていた芸術上の vision の世界へと彼女をいざなう役割を果たしている。

Oh Mrs. Ramsay! she [*i. e.*, Lily] called out silently, to that essence which sat by the boat, that abstract one made of her, that woman in grey, as if to abuse her for having gone, and then having gone, come back again Ghost, air, nothingness, a thing you could play with easily and safely (p. 275)

「幽霊」は、現実の生を表す「陸」の住人ではない。この幽霊のイメージは、実在の肉体をもたない幻の存在であるのみならず、時空の束縛を超えて充足の「瞬間」を体験出来、そして当然死の連想をとまなうことにより、海のイメージと重なり合う部分がきわめて多いといえる。

次に、ディナーパーティにおける Mrs. Ramsay の海のイメージを考えていくと、「水夫 (sailor)」のイメージがまず用いられている。

as a sailor not without weariness sees the wind fill his sail and yet hardly wants to be off again and thinks how, had the ship sunk, he would have whirled round and round and found rest on the floor of the sea. (p. 131.)

さらに、ディナーパーティの成功は海のイメージと共に描かれている。テーブルの蠟燭が灯され、外の闇を閉め出す時、海のイメージと共に「瞬間」が訪れる。

Now all the candles were lit, and the faces on both sides of the table were brought nearer by the candle light,....

Some change at once went through them all ... they were all conscious of making a party together in a hollow, on an island; had their common cause against that fluidity out there. (pp. 151-152.)

さらに、自らつくりあげた「瞬間」の満足感に酔う Mrs. Ramsay は Clarissa と同じく diver のイメージで描かれている。

as one passes in diving now a weed, now a straw, now a bubble, she felt again, sinking deeper, as she had felt in the hall when the others were talking, There is something I want—something I have come to get. (p. 183.)

これこそ Mrs. Ramsay が望んでいた状態、まさに「瞬間」の実現であると語られる。この二人の女主人公がパーティにおいて「瞬間」を実現した際のイメージには、死の投影はない。「瞬間」とは束の間にせよ生のただ中に実現するものだからである。それ故、生を望みつつも、大切なものを護るためには死を選びとるしかなかった Septimus が同じ海のイメージでも、“drawn sailor” (p. 96., p. 201) と描かれて、自殺を選ぶのとは対照的である。「瞬間」を実現して vision の海を漂う彼女たちは、海で死ぬことはなく、海

を自由に泳ぎ回る海の住人なのであった。そして、このような形で二人の女主人公は同じように、自ら死を選びとることなく、momentary visionとしての「瞬間」を手に入れたのであった。現実の生を表す「陸」のイメージによっては、それぞれ「冷たさ」「暖かさ」といった異なる側面が強調されつつ、共に「空」の太陽が表す時計の時間に否応なく拘束されながら momentary visionとしての「瞬間」をパーティーの中で実現して「海」のイメージで語られるという様に中期代表作の女主人公の特質はイメージの世界によっても見事に裏付けられているのである。

注

Mrs. Dalloway, To the Lighthouse の引用は Hogarth Press の Uniform Edition による。

- (1) cf., 拙稿、「空、陸、海、——ヴァージニア・ウルフのイメージ研究」(大手前女子大学論集第27号 1993)
- (2) Clarissa と夫との現在の関係は次のように語られている。
Narrower and narrower would her bed be. The candle was half burnt down and she had read deep in Baron Marbot's *Memoirs* For the House sat so long that Richard insisted, after her illness, that she must sleep undisturbed. And really she preferred to read of the retreat from Moscow. He knew it. So the room was an attic; the bed narrow; (p. 35.)
- (3) Mrs. Ramsay の、人々を結びつけようとする試みが切であるほど、その根底には生の苛酷さと人間の孤独に対する彼女の認識があるということも見逃してはならない。(cf., *To the Lighthouse*, p. 66., pp. 95-96., p. 124.)
- (4) この引用文に直接 pampass grass という言葉はないが、“the silver-green spear-like plants” が pampass grass を指すことは、その形状の類似と共に、p. 35., p. 108, p. 111. の記述からも明らかである。
- (5) Mr. Ramsay は “the beak of brass” (p. 63.) という風に、鳥のこの攻撃的側面から描かれている。
- (6) Clarissa の生に対する terror については次のように語られている。
Then ... there was the terror; the overwhelming incapacity, one's parents giving it into one's hands, this life, to be lived to the end, to be walked with serenely; there was in the depth of her heart an awful fear. Even now, quite often if Richard had not been there reading the *Times*, so that she could crouch like a bird and gradually revive, send roaring up that immeasurable delight, rubbing stick to stick, one thing with another, she must have perished. (p. 203.)
- (7) このめんどりのイメージについては、N. C. Thakur が次のように説明している。
Mr. Ramsay's saying “Pretty pretty” not only gave Mr. Bankes an odd illumination about Ramsay's being simple and sympathetic to humble beings, but also gave him an insight into his unconscious desire to have a wife and children. (N.C. Thakur, *The Symbolism of Virginia Woolf*, London, Oxford University Press, 1965, p. 86.)
- (8) cf., 拙稿「四つの “party” —— Virginia Woolf の中期三小説における “moment”」(*Osaka Literary Review* 第14号、1975)

- (9) 「空、陸、海——ヴァージニア・ウルフのイメージ研究」
- (10) *Mrs. Dalloway*, p. 204.
- (11) 「空、陸、海——ヴァージニア・ウルフのイメージ研究」